

ご挨拶



「退任にあたって」

会長 志手 典之（北海道教育大学岩見沢校）

5年間の任期を全う(?)し、平成30年3月を持ちまして、会長退任となりました。前会長・佐川先生の下

で、理事長として4年間、本学会の運営に当たり、平成25年度に会長に就任しました。現理事長・神林先生を始め、多くの役員の皆様を支えられた5年間でした。

中心的に学会運営に携わった期間に、北海道体育学会は若手の成長が著しい学会となったように思います。特に、若手研究者賞により、学会大会が大学院生だけでなく、学部生の発表の場にもなりました。また、卒業・修了したての現場の先生方も、校務多忙にも関わらず、研究成果を発表して頂き、本学会の発展に多

大な寄与をされたと思っております。本当に感謝いたします。

私ごとで恐縮ですが、ここ数年間、大学（+各種公共団体）の管理・運営に携わる職に就任し、年代的にいろいろと責任のあるポジションになったことを痛感させられます。如何に、職場の雰囲気を高揚させるかが、目下の課題です。そして、若い世代を育てることも、仕事の一つです。学会活動においても、そんな役割になったとともに、その役割をしっかりとこなすことが大事かなと思っております。

最後になりましたが、学会員の皆様、本当にありがとうございました。

「理事長の5年間を振り返って」



平成25年度から平成29年度までの5年間（2期、1期目2年、2期目3年）、理事長を務めさせて頂きました。この3月をもって、

任期が終了致します。この間、志手会長のもと、会員や役員の皆様にご助けをいただきながら、学会運営を無事、進めることができました。本当にありがとうございました。

さて、理事長1期目、ニュースレターの最初の挨拶を振り返ると、子どもの体力低下問題に触れ、学会としてもこの問題に対して何らかの貢献をしたいと書きました。それを振り返ると、学会大会において子どもの体力向上に関する研究発表が多くなされ、関連するシンポジウムも開催されました。学会としてこの問題

理事長 神林 勲（北海道教育大学札幌校）

には貢献できたのではないかと思っております。

また、理事長2期目の最初の挨拶では、HPをより活用した学会運営を推進したいと書きました。これにつきましてはまだまだ十分とは言い難い状況です。ですが、広報委員会の先生のご協力を仰ぎながら、機関誌、予稿集およびニュースレターのアップを積極的に行いました。気づかれ難い部分ですが、役員会での決定事項を郵送でお知らせするより早く、HPへアップして会員の皆様にご周知の方策も講じました。どちらも課題があり、十分ではありませんが、HPへの効率的な運用は少しずつ進んでいると感じています。

平成30年度も新たな会長、理事長および役員のもと、本学会が益々、発展していくことを祈願し、ご挨拶に代えさせて頂きます。ありがとうございました。

口頭発表傍聴記

伊熊 克己（北海学園大学）

本年度の口頭発表は大会両日に実施され、演題数は28題でした。その内、14演題が学部生と大学院生であり11演題は若手研究者による発表でした。今回の発表は、スポーツ指導、授業づくり、運動生理等、多岐にわたる分野の研究がありました。皆様の発表概要について報告します。

スポーツ指導の研究では、山中氏（北海道教育大学大学院）は、知的障害者の意欲的な運動部活動の取り組みと自尊感情との関連。八田氏（酪農学園大学（学部生））は、大学男子弓道部学生の体力と的中率との相関。下山氏（北翔大学（学部生））は、ASEプログラムが野外教育実習生の対人関係に及ぼす影響。秋月氏（北海道医療大学大学院）は、北海道マラソン出場男性ランナーの走行距離と身体の痛みの発生部位。平間氏（北翔大学（学部生））は、棒高跳び初心者を対象に、体操競技類縁運動における空中動作の指導効果。佐野氏（上富良野町立上富良野中学校）は、ピッチングの投球場面の違いが直球の球速と正確性に与える影響検証。玉田氏（旭川市立新富小学校）は、サッカートラップの準備の違いがトラップやパスのパフォーマンスに与える影響検証。星野氏（北翔大学大学院）は、ポスチュアウォーキングのバイオメカニクス的手法による研究。飯野氏（北海道教育大学大学院）は、中学生の部活動所属と学校生活との関連。田口氏（北海道教育大学大学院）は、スポーツ活動と音楽聴取との関係性検証。秋山氏（北海道教育大学岩見沢校（学部生））は、小学校教師志望大学生における発達障害理解度と障害観の検証でした。特に、発達障害者の特性理解と対応は、今後の教育現場の重要課題と考えます。湧川氏（北海道教育大学釧路校（学部生））は、スノーボードの新学習プログラム開発。多賀氏（苫小牧工業高等専門学校）は、ジュニアユースサッカー選手のドリブルトレーニングがドリブルスキルやゲームパフォーマンスに及ぼす影響検証。山本氏（北翔大学大学院）は、バドミントンアンダーハンドストロークの腰部負担を競技レベルから比較検証。大宮氏（北翔大学）は、ジャンプ遊びが小学生の運動能力に及ぼす影響。沼田氏（札幌国際大学大学院）は、大学男子バレーボール3段攻撃とブロックの攻撃結果に関わる要因検証。山内氏（北翔大学大学院）は、小学生を対象にポスチュアウォーキング指導の効果検証。阿部氏（北海道教育大学釧路校（学部生））は、アイスホッケー初心者の感覚養成

を狙いとする運動課題の検討でありました。以上、いずれの研究も大変興味深い内容であり、今後、指導現場にフィードバックされる貴重な資料提供に寄与するものと考えられることから、皆様のさらなる研究の発展を期待したいと思います。

授業づくり研究では、城後氏（札幌国際大学）は、大学基礎演習授業アクティブラーニング授業方式の導入効果検証と実践結果報告、森氏（北海道小樽潮陵高等学校）は、高校体育実技にアクティブラーニング指導プログラム導入の有効性検証であり、生徒や学生が主体的に問題発見する能動的学習体系教育の必要性を示唆するものと感じた次第です。清野氏（北海道釧路養護学校）は、知的障害特別支援学校の「相撲遊び」授業実践の効果検証、飛永氏（全日本空道連盟大道塾帯広支部）は、発達障害児童に対する空道トレーニングの効果検証でした。質疑応答では身体接触の危険性に関する議論もなされました。



用具特性や用具開発研究では、樋口氏（釧路工業高等専門学校）は、卓球ボールの材質と構造が反発に及ぼす影響、川初氏（北海道循環器病院）は水中ノルディックウォーキングの開発ツールの有効性報告でした。

生理的研究では、瀧澤氏（一般社団法人身体開発研究機構）は、経口摂取のエタノール分解速度と筋力および有酸素性能力との関係、佐々木氏（帯広大谷短期大学）は、香辛料を含むスープ摂取と氷点下環境暴露時の体温維持の有効性検証、木本氏（旭川工業高等専門学校）は、心拍変動解析を用いた至適運動強度同定の試みについての検証でした。生理的研究は、我々の日々の健康確保の指標データ提供になると考えます。今後の研究発展を期待いたします。

心理カウンセリング研究では、小谷氏（北海道教育大学旭川校）は、競技離脱を希求した大学生アスリートの内的体験の事例研究でした。発表において、対象者に寄り添うことが大切という言葉が印象的でした。

以上、ご発表頂きました全ての皆様に厚く感謝申し上げます。私の口頭発表傍聴記録とさせていただきます。

シンポジウム傍聴記

山口 太一（酪農学園大学）

第1日目の最後のプログラムとして「スポーツで地域をひとつに〜コミュニティの創成と醸成」というテーマでシンポジウムが行われた。大会担当の村田浩一郎先生（帯広畜産大学）をコーディネーターに、小田新紀氏（NPO法人幕別札内スポーツクラブ）、曾田雄志氏（北海道教育大学岩見沢校）、赤嶺多紀子氏（高野ランドスケーププランニング）がシンポジストを務められた。はじめに各シンポジストより自己紹介も兼ねてテーマに関連したお話をいただいた。

小田氏は幕別および札内を中心に総合型地域スポーツクラブを展開されており、まさに「スポーツで地域をひとつに」する活動をなされている。スポーツクラブではクラブの愛称、キャラクター、ユニホーム等も地域住民の意見で決めている。また、クラブと行政との関わりとして町からの委託により、体育授業の3割を担っていることや、幕別出身のオリンピック選手などトップアスリートと地域の方との交流等も行なっていることが紹介された。

曾田氏は主にトップアスリートのセカンドキャリアを支援し、スポーツビジネスを創成するA-bank 北海道を展開されている。トップアスリートのアスリート先生として、小中学校の体育の授業に派遣したり、中学校の部活動の指導に派遣したりしている。

赤嶺氏は今回のシンポジストの中で唯一、体育関連の先生ではなく、ランドスケープアーキテクトという職業で、公園等の景観整備や設計等を行なわれている。公園、庭園、幼稚園などの整備などをされた実績について伺うとともに、十勝サーカスというイベントで個人のエネルギーが集結した時のコミュニティの力を感じ、現在、十勝を拠点に活動されているとのことであった。

村田先生は大学のバックアップと大学施設の空き時間を利活用しながら、ちくだいKIPという体操教室を中心とした地域総合型コミュニティを展開されており、今後は企業や病院などと連携して他の事業も計画していることが紹介された。その後、村田先生より以下の3つのテーマが挙げられ、それらについてシンポジストからご意見を伺った。

① スポーツでメシを喰うその多様性

曾田氏よりアスリートがスポーツで培う能力として、自身のプレイを言語化し、コーチングにつなげる能力や年間プログラムに従って目的設定、解決および目標の再設定を繰り返すPDCAサイクルを遂行していく社会的スキルがあるものの、日本ではその能力および価値を活かす方法をアスリート自身が教わっていない。しかしながら、それらを有効活用することで「メシを喰う」ことにつながることをアイスホッケーチームの運営をされる方の具体例も含めて紹介いただいた。

また、小田氏からは現状スポーツクラブ経営は厳しいが、その理由として良い人材には対価として人件費を支払う必要があるからであることが挙げられた。スポーツの持つ力を利用して大きな企業と関連を持つことでそれらも解消できる可能性について説明があった。

② コミュニティのエネルギー

曾田氏よりコミュニティの代表者のエネルギーの発散が最も大切で、そのエネルギーに周りの人たちが惹かれることでコミュニティのエネルギーが大きくなることが紹介された。

また、赤嶺氏からはコミュニティにおける多様性が大切であること、そして、コミュニティにおける失敗が学びを生むことも述べられた。

さらに、小田氏からは赤嶺氏からの失敗が学びを生むことに関連して、法人の理事を総入れ替えしたこと、その際に小田氏自身がブレない信念を持つことを大切にしたいとお話いただいた。

③ アスリートのセカンドキャリア

曾田氏よりアスリートとしての活動年数は短いことから、どんなアスリートにも訪れることから準備が必要であることが述べられた。関連して村田先生より、東京オリンピックパラリンピックまで障害者アスリートの方の企業支援などが続くが、終了後まで続くかは疑問であり、セカンドキャリアを考える必要に迫られるのではないかと懸念も述べられた。

最後に、まとめとして小田氏よりスポーツの波及効果は大きく、自然にコミュニティを創成する力があること、また、赤嶺氏より、スポーツは様々なものとの親和性が高いことから、スポーツ以外のことを近づける力があり、地域をひとつにしてコミュニティを創生することができるのではないかとまとめられた。

私自身の研究分野とは異なるテーマであったため勉強不足の部分が多かったが、スポーツにはコミュニティを創成する力があること、そして、アスリート自身が気づいていない能力をしっかりとアスリート自身に理解してもらい、それを活用してコミュニティのエネルギーを大きくし、地域貢献につなげていくことの重要性を改めて感じた。興味深く、学びを深めるお話をいただいたシンポジストの先生方、そして、それらの有益なお話を引き出してくださったコーディネーターの村田先生には、心より感謝申し上げます。



ポスター発表傍聴記

井上 恒志郎（北海道医療大学）

2017年の学会大会では、大会1日目の午後に、ポスター発表が行われました。発表演題数は10演題と、多くの先生から研究報告がなされ、内容も実験的研究、調査研究、実践的研究と多岐に渡り、興味深い発表ばかりでした。以下に、簡単にではありますが、発表内容をご紹介します。

1) 「アルペンスキー競技回転種目におけるタイム分析-2017 Far East Cup (Yongpyong) を対象として-」近藤雄一郎先生（北海道大学）：2018年の平昌オリンピックで使用されるコースで行われたアルペンスキー回転種目のタイム分析を行い、競技成績が高い選手ほどスピードにのった状態でのラインコントロールが優れていることをご報告されました。

2) 「跳び箱の踏切練習が跳び箱に恐怖心のある大学生の助走と跳躍に及ぼす影響」板谷厚先生（北海道教育大学）：跳び箱に恐怖心がある人の助走パターン改善を狙った練習プログラムを独自に作成し、その効果と結果を踏まえた跳び箱指導上の“コツ”に関してご報告されました。

3) 「高強度運動後のアイスクリーム摂取がインスリン分泌、エネルギー基質利用および体温に与える影響」東郷将成先生（酪農学園大学）：アイスクリームが運動直後の回復食として有効かどうかを、エネルギーと体温の観点から検討し、アイスクリームが脂質利用を亢進させる可能性をご報告されました。

4) 「一過性運動及び健康教育実施が心身に及ぼす影響と運動継続への影響～乳児を育てる成人女性の健康問題を考えながら～」寅嶋静香先生（北海道教育大学）：乳児を育てる母親に対して実施した運動プログラムが体力、精神状態、運動継続率の改善につながる可能性があることをご報告されました。

5) 「学生の睡眠と健康状態に関する調査報告-アテネ式不眠尺度および睡眠習慣と自覚症状の調査結果より-」伊熊克己先生（北海学園大学）：大学生を対象としたアンケート調査結果から、現在学生の多くが夜更かし&不眠症傾向にあり、それに付随して欠食や疲労感の増加、無気力、体調不良といった問題を抱えていることをご報告されました。

6) 「小学校特別支援学級における長なわ指導の実践的研究-支援方法に着目して-」吉川博人先生（札幌市立あいの里西小学校）：運動が不器用な児童でも「跳べる」という成功体験を味わうことができる長なわの新たな支援方

法を考案し、授業内で実践した成果をご報告されました。
7) 「体育科教育学における授業実践に関する一考察-授業書方式の観点から-」佐藤亮平先生（北海道大学）：体育の授業が持っている特徴や性格、さらには現行の授業(教育)における問題点や課題を「授業実践」という観点から考察し、ご報告されました。

8) 「小学校通常学級における長なわ指導の実践的研究-「8の字抜け」と「8の字跳び」の指導に関して-」上家卓先生（札幌市中の島小学校）：小学生を対象に、チャレンジ要素や段階的な技術練習を組み込んだ「長なわ」の授業が運動意欲や運動の習慣化に与える影響についてご報告されました。

9) 「朝運動プログラムにおけるジュニアリーダー育成の取り組み～平成25年度から28年度までを対象として～」石井由依先生（北翔大学）：低学年の小学生に運動の指導が行えるジュニアリーダーの育成を目指して実施している活動の取り組み状況についてご報告されました。

10) 「中学校武道領域における「相撲授業」の可能性-段階的な試合を手がかりに-」小出高義先生（北海道教育大学）：「技の習得から試合」という従来型の単元構成ではなく、「段階的な試合を中心とした相撲授業」が児童の相撲に対する取り組みや自発的な学習姿勢に好影響を与える可能性をご報告されました。

発表終了後は、ディスカッションの時間が設けられ、参加者は発表者と活発に議論、意見交換をしていました。冒頭にも記載しましたが、今大会では基礎から応用(実践)に至るまで、幅広い内容の研究発表が見られました。このように研究対象・範囲が多岐にわたるのは“体育学”の大きな特徴であり、様々な視点を持った道内の研究者が集い、議論し、新たな研究を生むことが本学会大会の意義であると感じました。

ポスター発表は、口頭発表とは異なり、研究内容を十分に議論できるところが大きな魅力だと思いますので、本学会大会のポスター発表が「研究発展の場」として益々盛り上がっていくことを期待しております。



「学会賞を受賞して」

関 朋昭 (名寄市立大)

この度僕が、北海道体育学会賞を賜りましたこと、心よりお礼を申し上げます。受賞の対象となった6編の論文は、苦労・苦悶・苦闘の連続の中から出てきたものです。眼の前の研究課題との格闘以上に、同僚先輩後輩からの刺激によるところが大きかったです。以下に僕の思い出深い二つのエピソードを、まずはご紹介いたします。

1992年(大学院1年)のときに、はじめて本学会で研究発表をさせていただきました。発表後の質疑応答のときに、小林禎三先生から研究課題の核心をつく質問をいただきました。舞い上がっていた僕は、その質問に対してとんちんかんな返答をしてしまいました。今でも忘れられません。そして今でもその答えを探しています。答えが未だ出ていません。

2002年(苫小牧高専在職)のときに、はじめて「北海道体育学研究」に論文が掲載されました。その機会を与えていただいたのは岡野五郎先生でした。当時の査読者は3名でしたので、それぞれの審査コメントへの対応に無我夢中で取り組みました。論文が受理された後の解放感は今でも忘れられません。

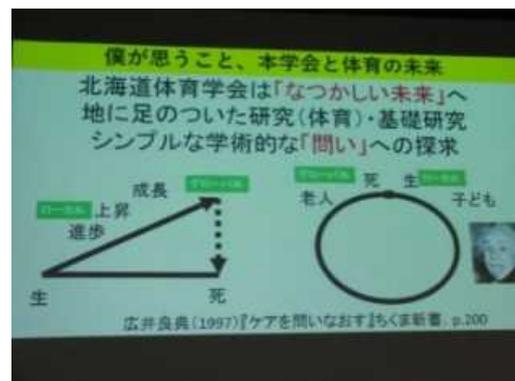
次に僕が専門にしている経営学(体育経営管理・スポーツ経営学)の紹介と最近の僕の研究動向について述べたいと思います。経営学は包括的な学問です。経営学の中では様々な学問的立場があり議論が絶えませんが、僕が大切にしている立場は次です。

経営学という学問は「人から出発して初めて真の問題に出会うことができる」という立場です。このように考えると、組織は「人」ということにつきまです。絶対です。「人」への眼差しから問題を追究して

いくことは決して些末なことではなく、むしろ重要なことは論をまちません。そうした立場から最近の僕の研究動向は、報酬(インセンティブ)に着目した研究を進めています。報酬というと少々下品な印象がありますが、経営学では人が組織から得られるものは経済的な報酬以外の多種多様なもの(昇進、ポスト、承認、愛情など)を想定しています。既述の小林禎三先生、岡野五郎先生が僕に与えてくれたこと(声掛け)もインセンティブの一つです。

このように人への直接的な働きかけからリサーチクエスションへアプローチする方法論を経営学の中ではウォームアプローチ(動機づけ)と呼ばれています。とても古典的な研究手法にみえるかもしれませんが、人間世界という根本的な原理を明らかにするためには有益な視点であると僕は信じています。

最後に、ここまで僕が頑張ってきたのは鬼籍に入った宇留間昂先生を抜きにしては語れません。宇留間昂先生からの叱咤激励は、僕にとって最高のインセンティブでした。「北海道体育学会」から「学会賞」を「僕」が拝領できたことを亡き師へ感謝を込めて伝えたいと思います。



若手研究者賞を受賞して

「受賞の感謝とこれからの抱負」

秋月 茜（北海道医療大学大学院）

この度は、北海道体育学会第57回大会において若手研究者賞という、とても光栄な賞を頂戴し恐縮ながらも大変嬉しく思っております。選考委員の先生方には厚く御礼申し上げます。今回の賞は日々ご指導頂いている山口明彦先生をはじめ、これまで多くの先生から頂いたご指導ご支援によるものと、この場をお借りしましてあらためて感謝申し上げます。

今回の発表テーマである「北海道マラソンに出場した男性ランナーにおける障害の部位と走行距離の関連」は、昨年の9月に日本体力医学会にて発表させて頂いたものの追加検討でした。内容は北海道マラソンに参加した男性マラソンランナーを対象に、障害の発生部位と走行距離との関連を明らかにするとともに、ランナーにおける障害予防の基礎的資料とするため身長や体重、年齢、走歴、完走タイム別にランナーの障害部位の発生率を示したものです。

今回の研究は山口明彦先生、井上恒志郎先生が主導で調査されていたもので、分析から関わらせていただきました。本研究によって男性マラソンランナーは走行距離の増加に伴って腰や太もも、足部の障害発生率が高まる傾向にあることが明らかとなりました。

マラソンや障害など私にとって新しい分野であり、まだまだ知識不足な点が多くありますが、アンケート内容を検討し継続して調査を続けていく中で、自分自身レベルアップできるよう邁進する所存でございます。今後も一般市民のマラソンランナーの方を対象に練習状況や障害など調査し得られた知見が少しでもお役に立つことができれば嬉しく存じます。

今回の名誉な賞を励みにこれからの体育・スポーツの発展に貢献できるよう、今後もお一層の努力を重ねて研究して参りたいと存じます。まだまだ、研究者として未熟な点が多い私ですが、何卒引き続きご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



「若手研究者賞を受賞して」

佐野 元基（上富良野中学校）

この度は、このような賞をいただき、大変光栄に思っております。

本学会大会では「ピッチング場面の設定が直球の球速と正確性に及ぼす影響」という題目で発表をさせていただきました。私は小学生の頃から野球を続けており、高校からは投手をしてきました。そんな中、良い打者やとても小さい打者を相手にし、苦しい場面や、つい油断してしまう場面などをたくさん経験してきた中で「投手の投球は、場面の影響を受けるのではないかと考えたのがこの研究の背景です。

投手の投球に関しては、動作へのアプローチに関する報告が数多くあります。しかし、投手は試合において、常に同じ条件で投球ができるわけではなく、相手チームや試合展開、気象条件や観客の有無など、いわゆる心理的な面でのプレッシャーが多く存在します。そんな中で、投手が試合において必ず直面する「ピッチング場面」という部分に着目して、一定の研究成果が出たことで、よく言われてきた「力み」や「置きに行く」といった、やや曖昧な表現で片付けられてきたものの原因に、新しい立場からアプローチできたのではないかと手応えを感じています。

勤務をしながら本学会に向けて準備をすることは体力的に厳しい部分もありましたが、受賞したことで報われた気持ちです。もちろん、自分1人の力ではここまで来られず、忙しい時間の間を縫ってご指導をいただいた板谷厚先生、また、様々な場面で助けてくれた皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本研究は、まだまだ厚みを増すことができると考えています。更に実践的な場で役立たせるために研究を重ねたいと思います。それと同時に、野球だけでなく、他分野でもつながるような研究になればと考えています。常に新しい目線を持てるように日々観察しながら、精進を重ねていきたいと思っています。



北海道体育学会第 57 回大会を終えて

大会担当 村田 浩一郎（帯広畜産大学）

この度は、第 57 回北海道体育学会大会を無事開催できましたこと、役員ならびに学会事務局をはじめとする多くの方々に厚く御礼申し上げます。

特に、準備段階から関朋昭先生には大変お世話になりました。恥ずかしながら、私自身が学会大会に参加（しかも運営）するのは 10 年ぶりでありまして、関先生からの「リマインダー」をこなすだけで大会準備ができていくという、ベルトコンベアー方式の大会準備に感銘を受けたと同時に、私の力不足を痛感した次第でございます。関先生には、この場をお借りして御礼申し上げます。

今大会は 38 題と多くの演題数に恵まれました。参加者も 75 名と多く、主に学部学生の参加増が顕著だったことによります。それだけ若者がチャレンジしやすい場であると同時に、多くの先生方がこの学会を育成の場として位置付けているということでもあると思います。

会場で発せられるコメントは、ダメ出しではなく、「だったらこうしてみたら？」というものが多かったように感じています。教員と学生の、相互に認め

合い、刺激し合う様子が、発表や懇親会の場面などで随所に見られました。テーマのオリジナリティやデータの有益さなどで優劣を測られる研究者は、時に孤独でしょうが、ここでは北海道の大きな器に守られ、育てられているのだと感じずには居られませんでした。今後もそのファミリーが、学会大会という固定場面以外でも手を取り合っていけたら素晴らしいことだと思っております。

大会を終え、安堵の気持ちに包まれましたが、同時にモチベーションも上がりました。私も体育の人間として、皆さまに負けているわけにはいきません。またお会いできる日には、私からも有益な情報を発信できるように努力したいと思います。

最後に、ご参加いただいた全ての方々に心より御礼申し上げます。



研究委員会活動報告

研究委員長 森田 憲輝（北海道教育大学岩見沢校）

今年度も研究委員会では、学会賞ならびに若手研究者賞選考を実施しました。ご存知のように学会賞は名寄市立大学の関朋昭先生が受賞されました。関先生の受賞記念講演では、受賞対象となったこれまでの論文が本学会の機関誌に掲載されるまでの苦労やそれまでの紆余曲折とその時々の本学会の情勢などもお話し頂き、懐かしい思いを抱きつつ拝聴しました。また、テーマの変遷は多くの方が経験されているかと思いますが、関先生からも思考と試行を繰り返しながら、研究者として物事を突き詰めていく研究生活を伺えたように思います。

他方で本年度の若手研究者賞は、上富良野中学校の佐野元基先生と北海道医療大学大学院の秋月茜先生が受賞されました。お二方が発表された演題はいずれも実践的内容であり、多くの運動・スポーツ指導に携わるものにとって興味ある内容だったと思います。佐野先生は野球のピッチャーのコントロールと球速に関して当初の予想とは異なる結果も

得られ、そしてそれを考察するという研究者の多くが突き当たる厄介な状況をよくまとめていたように思います。

また、秋月先生は北海道マラソンという道内で開催される最も大きなスポーツイベントにおける調査を報告されました。近年マラソン愛好者が増えており、そのようなスポーツで、かつ国内有数のマラソン大会での調査はスポーツそして関連分野の学問が発展するための基盤的な知見を提供していたように思います。

最後に、今年度が任期最終年度のため、この 3 月で研究委員会も交替になります。この期間、私自身の力不足のため学会や会員の皆様にとっては、十分な働きはできていないかと思っております。この場を借りてお詫びさせていただきますとともに、それをサポートしてくれました他の委員の方々と会長・理事長そして事務局の先生方にお礼申し上げます。

編集委員会活動報告

編集委員長 石澤 伸弘（北海道教育大学札幌校）

編集委員を2期5年務めました。第52巻の発刊をもってその任から解放されることとなります。在任中、48巻から本巻までの発刊をサポートして参りましたが、各巻それぞれに異なる思い出があります。特に第50巻の特別号の発刊に携われたことは最大の荣誉であり、当学会の60有余年の歴史にも触れることが出来ました。歴代会長と名誉会員の先生方の寄稿文から学会の萌芽期に思いを馳せ、諸先輩方のご苦勞と学会発展の一端を垣間見る事ができ、自分自身にとって大きな学びとなりました。この場をお借りして、このようなご縁を与えていただいた学会員の皆さま方に感謝申し上げます。

年末年始のスポーツに関する報道を見てみますと、「2018平昌オリンピックまであと数週間」や「ラグビーワールドカップ2019のチケット予約がスタート」、あるいは「東京オリパラ2020まであと数百日」といったものが立て続けに発信され、来たるべきメガイベントの盛り上がり、いよいよ大きなうねりとなってきたことが実感されます。

その中で、当学会が果たす役割も更に大きなものになっていくことでしょう。その観点からも学会のアウトプットの代表格である本学会誌「北海道体育学研究」がこれから益々発展することを願ってやみません。

そのためにも学会員の皆さまのより一層のご支援とご協力を賜りますことをお願いして、離任の言葉とさせていただきます。5年間ありがとうございました。

そのためにも学会員の皆さまのより一層のご支援とご協力を賜りますことをお願いして、離任の言葉とさせていただきます。5年間ありがとうございました。



広報委員会活動報告

広報委員 木本 理可（旭川工業高等専門学校）

広報委員を務めさせていただき、今年度で5年目となりました。広報委員会の主な活動は、「ニュースレターの発行」と「学会HPの運営」となっておりますが、私はHPの運営を中心に業務させていただいております。

はじめて役員業務に携わった当時、HPは外部委託しておりましたが、運営のための費用削減とより積極的な更新等を目指して、2014年9月にHPのリニューアルを行いました。それまでHP運営に関わったことの無い素人だったため、はじめはわからないことだらけでしたが、役員をはじめ皆様のご協力のおかげで何とか安定して運営できるようになりました。

HPには、会則をはじめとする各種規定や役員会議事録のほか、北海道体育学研究や学会大会予稿集などが随時アップされ、閲覧できるようになっております。また、一昨年度からはニュースレターも電子化されました。今後も、学会からの情報発信や皆

様の情報共有の場としてHPをご活用いただけるよう、より充実した運営を目指していきたいと考えておりますので、会員の皆様にはぜひ時折にでもご覧いただいて、ご意見等いただけますと幸いです。

(HPアドレス：<http://www.hspehss.jp/>)

まずは、会員の皆様の研究成果をより広く公開できるよう、学会誌データベースに検索機能を追加したいと考えております。近いうちに…とお約束ができず恐縮ですが、出来るだけ早く対応したいと考えておりますので、どうか気長にお待ちください。

また、今後はHP更新のお知らせやHPを活用した役員選挙の実施等も行いたいと考えており、そのために会員の皆様のE-mailアドレスの集約を行っております。詳細はHPのトップ画面からもご参照いただけますので、ぜひ皆様のご協力をお願い申し上げます。

(HPアクセス数 2015/12/18 13時:3780, 16/12/21 15時:8808, 2017/12/19 12時:13954)

(共に育つ)

徳田 真彦 (北翔大学)

1年半前に大学教員という立場となり、自身の指導力不足を痛感することや、何事にも責任が伴う立場となったことなど、学生時代との違いを痛感する日々を送っていますが、一方で教員としての喜びを感じる事も多くありました。自分の関わった学生が活躍している姿を見ると、何とも誇らしく、自分がうまくいった時以上の喜びを感じました。これは私にとって初めての感覚でした。

さて、そのような生活を送る中で、自身は学生を、「育てる」立場でありながらも、学生から「育てられている」と強く感じています。学生は素直なもので、知識や技術がしっかりと身につけている事を教える際は、とても集中した表情をして聞き、活動にも積極的に取り組みます。しかし、少しでも曖昧な部分や筋が通らない事があると、途端に集中力が切れ、納得していない表情を見せます。

また、野外教育研究会という学生の組織を指導し

ているのですが、活動方針や組織の在り方について、年齢が近い事もあってか、熱い議論を交わす事もしばしばあり、時に学生の言い分に納得させられる事もあります。こういった良い意味でのプレッシャーを感じつつ、「もっと力をつけろ」と嫌でも私の向上意欲を高めてくれる存在となっています。

そういう意味では、私にとって学生は、時に先生でもあるかもしれません。また、時にはライバルでもあり、時には仲間でもあるかもしれません。こういった存在として在る学生達に感謝しつつ、教員という立場として、同じ土俵でいるわけにはいきません。まだまだ力不足ではありますが、いつになっても学生には、「高い壁」として前に立ち、「かつこいい」存在で在り続けたいと思います。その責任を、強く心に持ちつつ、学生と共に育っていきたいと思います。

(経験をふりかえり思うこと)

吉川 博人 (札幌あいの里西小学校)

北海道で住み始めてからもうすぐ10年が経ちます。この10年間で様々な方々との出会いや学びがありました。そのなかでも、青年海外協力隊としてモザンビークで過ごした2年間は今の自分を形成する一つの大きなできごととなりました。上家先生から受け継いだリレーは、そのことについて少し触れたいと思います。

このエッセイのために、当時の応募願書を見返しました。「住民理解を心がけ、受け入れてもらえるように誠実に対話や行動をしたいと思います。」や「相手の要求の有無や程度によらず支援すること、そして、人と人のかかわり合いを大切に、信頼関係を築いていきたいです。」と、見返せば見返すほど理想と希望に満ちていた自分が恥ずかしくなります。

実際は、派遣中の手探りのコミュニケーションと要請された活動ができないことに非常に苦労しました。ここでは収まらない程、なんだかんだあったのですが、帰国直前の報告書では「外国人である自

分を家族のように接してくれたことに感謝したいです。」や「改善や達成を目指して協力することを通し、共通の価値観や信頼関係を築くことができた経験はかけがえのないものです。」など、充実した隊員生活であったことがうかがえます。

さらに、「帰国後は教師を目指し、学校教育や教育活動を通して参加経験を伝えながら自分たちの生活を見つめ直すきっかけを与えたいです。」とありました。現在、特別支援教育に携わっています。日頃の教育活動を通し、子どもたちや自分の生活を見つめ直すことができているか、もう一度この経験に立ち返ってみたいと思いながら、明日からまた、子どもたちの教育と向き合っていくこととなりそうです。

最後まで目を通していただき、ありがとうございました。今後の生活でもたくさんの方々にお世話になるとはと思いますが、よろしく願いいたします♥

事務局より

安部 久貴（北海道教育大学岩見沢校）

平素より大変お世話になっております。当学会幹事として事務局業務を担当しております、安部久貴（北海道教育大学岩見沢校）と申します。平成27年度から今年度まで3年間事務局業務を務めさせて頂きました。

初めての学会事務局ということもあり、慣れないことが多く会員の皆様にはご迷惑やお手数をお掛けしてしまうこともありました。会員の皆様のご理解ご協力のお陰で、どうか役割を全うすることができましたこと厚く御礼申し上げます。来年度より会長、役員が改選され体制が一変いたしますが、引き続き当学会の活動にご理解ご協力賜りますようお願い申し上げます。

さて、平成30年度の本学会の事業と致しましては、まず、5月19日（土）に臨時総会と話題提供発表が行われる予定です。臨時総会では、前年度の事業報告と決算報告および新年度の事業計画と予算案の審議が行われます。また、臨時総会後には、会員相互の情報交換と研究内容の深化を目的として話題提供発表を開催いたします。

これは、過去のデータの再分析結果、他学会などの発表と同一内容のものや構想段階のものも発表できる機会となっており、29年度は6演題の発表がありました。今年度はより良い発表の場になるように、発表形式等を再検討しておりますので、臨時総会だけでなく話題提供発表にも奮ってご参加、ご発表頂きたく存じます。

また、30年度の学会大会は、12月初旬に北海道医療大学にて開催予定にしております。近年の学会大会は発表数が30演題を超え、大変盛況に行われております。発表申込みと抄録原稿の締め切りは、おそらく10月中旬頃になる見込みですので、お早目に発表のご準備を進めて頂きたく存じます。学会大会にて多くの会員の方々にお会いできますことを心より楽しみにしております。

学会大会などに関する詳しい情報は、郵送にてお知らせするほか、学会HP（<http://hspehss.jp/>）に掲載いたしますので、随時ご確認頂けますと幸いです。

★★

編集後記

ニュースレター9号では、帯広畜産大学で開催された学会大会の様子を特集いたしました。本大会は、若手からベテランまで道内各地より（いや道外からも駆けつけた会員も）、多くの会員の参加者を得て盛大に行われる共に、参加者の平均年齢がぐっと下がったことが特色といえます。この活気がさらに継続していきますように、指導教官のもとを巣立っても、それぞれの場でまとめた研究成果を持ち寄って参加いただければと思います。できれば、興味・関心のある仲間を誘って参加いただければ、何よりの広報活動となるでしょう。

本号を会員の皆様にお届けできたのも、年末年始のご多忙の中にもかかわらず原稿を執筆頂いた先生方のご協力があったからに他なりません。末筆ながら御礼申し上げます。どうも有り難うございました。

広報委員会委員長 小出高義

北海道体育学会ニュースレターNo.9 平成30年1月末日発行

★★

是非ご覧下さい 北海道体育学会公式ホームページ <http://hspehss.jp/>